

公に殉じた先輩の血と汗と涙を

拓殖大学学長 渡辺 利夫

建学の原点への回帰

本大学は二〇〇〇年において創立百周年を迎えた歴史と伝統のある大学である。一九〇〇（明治三十三）年「台灣協会学校」として誕生し、アジアに目を向けた日本における唯一の教育機関として各方面から熱い眼差しを注がれて出発した。

二〇〇〇（平成十二）年の建学百周年においてはさまざまな記念行事が執り行われたが、メインテーマは「建学精神への回帰」であった。

建学の精神は「積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格」であった。

拓殖大学ルネサンス

インターネットで気軽に国境を越えられる現代社会で国際大学はどうあるべきか。

混乱する世界情勢の中でしっかりと未来を見つめるためにはどうすればいいのか。

そうしたことにして原点に立ち返る

り、二〇〇三（平成十五）年から「拓殖大

学ルネサンス」を標榜し、三項目の指針を

*国際学部の延長線上に「大学院国際協力学研究科」を新設。
*イスラム研究の伝統と人脈を生かした「イスラム研究所」の設置。
*開発教育に関する幅広い事業を展開する「国際開発教育センター」の新設。

*拓殖大学ルネサンスの核となる「文京キャンパス整備事業」を始動。すべての設備・拡充して社会のニーズに応えようというものである。

工予定は二〇一三年八月で、都心でも最高の地の利を誇る文京キャンパスを整備・拡充して社会のニーズに応えようとしたものである。

日本の最重要課題の生涯教育の拠点としても対応したい。

国内のみならずグローバル的にも大学間競争を見据えた二十一世紀にふさわしい大學として、第二の建学を目指している。

公に生きることへの誇りを持てる。

「人種の色と地の境 我が立つ前に差別なし」

この校歌の第三節冒頭こそ本学の原点である。

（寄稿）



渡辺利夫（わたなべとしお）
一九三九年山梨県生まれ。
慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。
筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、二〇〇四年より現職。

ODA総合戦略会議議長代理。
第十七期に本学術会議会員。
主著に『成長のアジア』停滞のアジア』（吉野作賞）、
『神経症の時代』（開高健賞）などがある。

写真提供 拓殖大学

挙げている。

一、国際的な視野に立って、自らの意志で積極的にグローバルな行動ができる創造的能力を身につけた有為な人材育成。

二、世界的平和やアジア各地域の発展に貢献できる学術・文化の研究調査と、その社会的還元ができる情報の発信。

三、日本とアジア各地域の友愛と発展に貢献できる留学生教育の積極的展開を図る。

この三項目を叶えるために次のような施策の実施をしている。

*国際学部の延長線上に「大学院国際協力学研究科」を新設。

*イスラム研究の伝統と人脈を生かした「イスラム研究所」の設置。

*開発教育に関する幅広い事業を展開する「国際開発教育センター」の新設。

戦後の日本の教育における最大の問題は「私」的に生きることをよしとし、「公」を否定し公のために生きることの誇りを摩滅させてきたことにある。若者の公への無関心と規律弛緩の根因がここにある。貧しき者、虐げられし人々、弱い立場の人間に温かい手を差し伸べることの晴れがましき幸福を学生に体得させたい。

拓殖大学の伝統は、「公に生き公に奉仕する人間を育成する」ことにある。台湾をはじめ、他のアジア諸国やラテンアメリカの多くの国々で公に殉じた先輩たちの血と汗と涙があつて、拓殖大学が拓殖大学たりえている。

本が変わると私は考えている。偏差値で語ると本学新入生のその値は日本の若者、つまり日本の大学生のマジョリティーである。我々が教育しているのは日本の平均的な若者であつて、エリートではなく大衆である。彼らを教化せずして日本の改革が可能なわけがない。マジョリティーを教化し改革を為しているからこそ拓大が変われば日本は変わるのである。学生を公的モラルに目覚めさせることは教育の現場における喫緊の課題である。

本は変わらないが、拓殖大学が変われば日